『語学教育研究論叢』第 35 号

幕末明治期漢文小説から見る近世漢語の受容
—『唐話纂要』所収「孫八救人得福」の傍訳を中心に—

鐘　一沁

A Study on Early Modern Chinese Reception through *Wakankidan*
：Focusing on side notes of Chinese vocabularies

Yiqin ZHONG

摘要

江户时期，德川幕府的政策下日本的对中国及荷兰贸易只能通过长崎一港进行。除铜、丝、陶器等为主的货物以外，据《舶载书目》记载还有很多通俗小说传入日本。庆长九年，德川幕府在长崎奉行下设置唐通事机构，从而以唐通事为中心的唐话学也日渐盛行。唐通事是指当时在长崎从事对清贸易的职员，在日清贸易的频繁以及儒学经典及白话小说的盛行下，他们除了翻译以及贸易业务以外还担任小说等的翻译及唐话的教授工作。

本论文的研究对象就是担任唐通事的冈岛冠山所著，当时最流行的唐话教科书第六卷中收录的原创白话小说《和漢奇谈》中的“孙八救人得福”一文。《和漢奇谈》中一共收录了两篇白话小说，而且在各自的汉文原文后都付有日文译文。且译文中出现的汉字词汇上都有标注其读音或解释。

本论文旨在通过对“孙八救人得福”译文中出现的汉字词汇上所标注解的分析，试论中国近世汉语在江户时期的受容状况。

【キーワード】 唐話纂要　唐話学　近世漢語語彙　漢文白話小説

1. はじめに

日本における漢語学習は主に『論語』や『詩経』などの文語主体とした所謂正統漢籍を中心としてきたが、その後鎌倉期の禅語録や、江戸時代から明治時代初期における漢学及び漢語口頭語主体とした唐話学が盛んであった。江戸時代になって、幕府の政策下、長崎は多くの清人と清からの輸入品を受け入れる窓口になった。長崎は当時日清貿易の中枢であり、文化的輸入の中枢でもあった。そこで、貿易船の船員との言語接触の最前線に立つ唐通事と言う職業が成立された。唐話学の中心である「唐通事」は「事に通じる」役割を持ち、今日の総合商社的な役割も持ち、長崎において清国との貿易実務に従事しながらも、唐話を教授し広げる役割を担った。それ故に、唐話学習に欠かせない通俗小説・白話小説に対する需要は強くあり、当時明末から清の時代にかけて出版・作成された白話小説も日本に大量に流入し、大きな影響をもたらした。『海外奇談』のような日本伝統戯曲作品を翻案した作品もあり、『赤縄奇縁』のような中国文学作品を翻訳した作品もある。また、唐話学の発展により、唐話教授のために書かれた創作作品も見られる。

2. 研究対象

本稿の研究対象となるのは『唐話纂要』巻六所収、『和漢奇談』に収録されている「孫八救人得福」と言う漢文小説及びその訳文である。

『唐話纂要』とは当時最も流行した唐話の教本である。長澤規矩也が編著した『唐話辭書類集』、『唐話纂要』の解題によれば、巻一から巻三の前半までは、二字至六字の語句に、江南音を旁注し、和譯を下に加えた。巻三後半には常言（通行の格言）を収録し、巻四は會話の發音及び譯文である。巻五は類書の如き内容分類の語彙を羅列し、そして時調（流行歌）に江南音を旁注し、最後に又、織物に関する語彙に発音訳語を収録した。この形で享保元年秋、江戸須原屋久右衛門初刊した。後、巻六として、和漢奇談（版心）一

冊を補い、「白話短篇小説二篇」に、発音・四聲を施し、各篇末に文語の譯文を添へて、享保三年、出雲寺和泉掾が印行した。[1)]

編者は長崎での通事経験があり、唐話講師も務めた岡島冠山である。岡島冠山は唐通事の経験と譯社での教授経験を生かし、『唐話纂要』を編纂した。「恐らく刊行された唐話入門書の嚆矢であり、而もそれ以後の追随を許さぬほどのものである『唐話纂要』が、必ずや譯社における数年教授の経験の結果に違いない」[2)] とも言われている。

奥村佳代子によると、『唐話纂要』は「唐話」と名のつく書物の第一作[3)]であり、唐話教科書が唐通事の唐話学習には欠かせないものである。当時唐通事が唐話学習で用いた教科書について、石崎又造は『近世日本に於ける支那俗語文学史』で以下のように述べている。

> 其の教科書は何んなものであったかと言へば最初、三字經・大學・論語・孟子・詩經等で發音を學び、次に、二字話・三字話・長短話等で常用の語彙を覺え、更に譯家必備・養兒子・三折肱醫家摘要・二才子・瓊浦佳話・兩國譯通など唐通事編輯の冊子を卒業すると、今古奇観・三國志演義・水滸傳・西廂記・などを學習し、更に進んでは福惠全書・資治新書等の實用的な方面を學習した。其の他の教科書としては、「俗語彙編」五巻・「譯官雜字簿」・「華語詳解」・及び岡島冠山の「唐話纂要」・「唐話便用」等が入門の必讀書であった石崎又造『近世日本における支那俗語文学史』（光明社　1967.09.15）。

よって、唐通事の唐話学習は経史子集などの経典からはじめ、最終的には実用的な俗語や白話を習得する。また、『唐話纂要』は唐話入門の「必讀書」であることも明白である。

本稿では、『唐話纂要』巻六である『和漢奇談』に収録されている、「孫八救人得福」と言う漢文小説の訳文に現れる白話語彙に振られる傍訳を研究対象とする。「孫八救人得福」は世情類漢文小説であり、その漢文で書かれている原文もその後ろに付く日本語訳文も、岡島冠山による作品である。「孫八救人得福」は、「孫八」という長崎出身の落魄れた人が、天神からある少

年を助けることを頼まれた夢を見て、お金持ちの息子を救い、義兄弟の契約を結んだ。その後、お化け屋敷にいた妖怪を退治し、最終的に「福を得て」金持ちになった物語である。

3. 先行研究及び問題点

『唐話纂要』は「唐話」と名のつく書物の第一作であり、「和漢奇談」は唐話教材の手本としても日本における破天荒の漢文白話小説だと評価されている[4]が、それに対する論述は極めて少ない。

「和漢奇談」における白話語彙については、王佳璐による「岡嶋冠山の漢文小説に見る白話語彙の性格ー「太平記演義」と「唐話纂要」巻六との比較を中心にー」[5]が見られる。王佳璐氏は論考で『太平記演義』と『唐話纂要』巻六（『和漢奇談』二篇）における白話語彙の特徴を品詞分類法によって分類し、分析を施した。しかし、王佳璐氏の論述は主に『和漢奇談』二篇に於ける漢文小説原文を研究対象とし、各篇末に書かれている訳文に関してはあまり取り上げていなかった。また、「特殊用語」に分類されている「干隔澇漢」などの白話語彙については、「『太平記演義』の語彙は『水滸伝』から受ける影響が大きく、『唐話纂要』巻六の語彙は『三言二拍』から受ける影響が顕著である」と述べている。それは、『太平記演義』は講史類小説であり、『唐話纂要』は世情類小説であることに原因があると考えられるが、その点についてはまた検討する余地があると考える。

本稿では、以下幾つかの語彙を取り上げて、検討分析を加えて行く。

4.「孫八救人得福」における漢字受容の実態

「孫八救人得福」の訳文より採取した左ルビが振られている延べ 901 語のうち、訳注だと判断できるのは 236 語である。本稿では、その中から典型例を 3 つ取り上げて分析を施す。

1）干隔澇漢（ヒカゲモノ）

【漢文】後有事故而被官逐放、遂爲干隔澇漢、而流落京師。

【訳文】後事有テ逐放セラレ。遂ニ干隔澇漢トナリテ。京都ニ流落。

（後、事情があって追放され、遂にヒカゲモノになり、京都に落魄れた。）[6]

上記の原文から見ると、岡島冠山は「干隔澇漢」を「ヒカゲモノ」と注釈している。「ヒカゲモノ」は漢字に改めると「日陰者」であり、表立っては世の中に出られない人を指している。文脈によれば、孫八は事情があって追放された身分である爲、正に世には堂々と出られない人である。『小説字彙』にも「干隔澇漢」という言葉が収録され、逸文は同じく「ヒカゲモノ」である。現代日本語で言えば、「訳ありな人物」とでも訳せるであろう。

一方、漢語語義としては、以下のような演変を経たと考えられる。「隔澇」は本来「疥癬」を意味し、「漢」は「男性」を意味する。よって、「干隔澇漢」は元々「疥癬にかかった人」を指していたが、後、「汚い人」から「まともな仕事を持たない人」を意味する口頭語となった。『水滸伝』明容與堂刻本第一回にも以下の用例が見られる。

【例】他平生專好惜客養閒人，招納四方干隔澇漢子。

（彼は平素客好きで、遊び人を養うことを好んで、あらゆる所から訳ありの人物を招いた。）

ここに現れる「干隔澇漢子」は「閒人」と同じく、仕事がない人を指している。よって、「干隔澇漢」は元々仕事がない人を指しているが、江戸期においては、漢文小説における「干隔澇漢」を「ヒカゲモノ」と解釈されるのは一般的であろう。「孫八救人得福」訳文の「干隔澇漢」に対する「ヒカゲモノ」という傍訳は、孫八の境遇を考えた上の適訳と言える。

2）遊俠（ヲトコダテ）

【漢文】昔在長崎有孫八者。膂力過人、遊俠自得。

【訳文】昔在長崎ニ孫八ト云フ者アリ。膂力人ニ過キテ。遊俠ヲ自得ケル。

（昔、長崎に孫八という人がいた。彼は人より力持ちで、男伊達を誇りにしていた）

原文によると、岡島冠山はこの場合「遊俠」を「ヲトコダテ」（男伊達）と注釈している。一方、漢語として「遊俠」は二つの意味を持っている。

ⅰ劉義慶が編纂した『世説新語』自新篇に用例が見られる。それは、戴淵という人に関する記述で、「戴淵少時，遊俠不治行檢，嘗在江、淮間攻掠商旅。陸機赴假還洛，輜重甚盛。」と書かれている。「戴淵は、若い時、遊俠にふけり、行いが治まらなかった。」と云う意味である。この場合の「遊俠」は決して「信義重んじる男伊達」だとは言えない。むしろ、いたずら者あるいは、まともな職を持たずにブラブラする人だと判断したほうが適切だと考えられる。

ⅱ司馬遷が著した『史記』・「游俠列伝」によると、「今言う遊俠とは、その行為が世の正義と一致しないことはあるが、しかし言ったことは絶対に守り、なそうとしたことは絶対にやりとげ、一旦引き受けたことは絶対に実行し、身を投げ打って、他人の苦難のために奔走し、存と亡、死と生の境目を渡った後でも、己の能力におごらず、己の徳行を自慢することを恥とする、そういった重んずべきところを有しているものである」。よって、この場合「遊俠」は「その行為は世の正義と一致したいことがあるが、立派な男伊達」という意味である。

よって、「孫八救人得福」の文脈を辿ると、この場合「遊俠」は「男伊達」（ⅰ）よりも「無職」（ⅱ）と解釈したほうが適切だと考えられるが、岡島冠山は敢えて「他人の苦難のために奔走する男伊達」と意味づけた。それは、作者が読者に孫八の人柄を分かるように情報を追加した適切な傍訳だと考えられる。

3）不𪗋不𩞁（フラチ）

【漢文】况彼容貌不甚醜、年紀未爲大、因屢有是非、不𪗋不𩞁、教爹娘竟放心不下。

【訳文】且小兒カ容貌甚リ醜モ候ハズ。年モ未タ大タルニモアラザルエヘ。毎度何ヤラ是非ガマシキ。不𪗋不𩞁ノ事ドモ之アリテ。父母ヲシメ放心致サシメス。

（そして彼はそんなに醜くないし、また若いから、度々厄介なことを招いて都合の良くないことに遭ったりして、親としては

とっても放っておけないのです。）

上記の例文から見ると、岡島冠山は「不尷不尬」を「フラチ」と注釈した。「ふらち」は「道理はずれなこと」、若しくは「要領を得ないこと」を意味する。文脈によれば、亀松の父親は自分の息子を、見た目はそこまでも醜くないし、年齢もそんなに取ってないから、時々よくないことに遭ってしまうと言い、心配しているから正に「道理はずれで、よくないこと」だと判断出来る。

「尷」と「尷」は異体字であり、「尬」と「尬」は異体字である。岡島冠山が翻案した漢文小説『太平記演義』においても、「不尷不尬」の用例が見られる。第十二回に、「比及走過長崎四郎判官高貞馬槽前、被守槽門軍士等攔住正成、而盤問到：「爾是甚人？不尷不尬、來得蹺蹊」」[8] という文書が見られる。この場合は、「不尷不尬」を「蹺蹊」と連用し、意味は同じである。「蹺蹊」は「怪しい。道理外れ」という意味で、「不尷不尬」も同じく「怪しい。道理外れ」という意味である。よって、例文の場合は、「軍士が正成を停めて、「あなたは何者だ！怪しいし、今ここに来るなんて疑わしいぞ！」と聞いた」という意味である。

一方、漢語として、「不尷不尬」は白話小説において以下のような意味を包含している。

ⅰ明代蘭陵笑笑生が著した『金瓶梅詞話』では、「那薛姑子就有些不尷不尬，專一與那些寺裡的和尚行童調嘴弄舌，眉來眼去」という用例を載せている。此の用例は、「あの薛氏はちょっといやらしくて、いつもお寺のお坊さんや修行中の僧とイチャイチャしている。」と言う意味で、「不尷不尬」は「いかがわしい、嫌らしい」という意味である。

ⅱ明代劉東生が著した『嬌紅記』第三十八出「榮晤」では、「似這等不尷不尬、沒底相思、害的我蕭蕭頭白。」という用例が見られる。この用例は、「このような、どうしようもなく限りのない思いで、私は白髪まで生えた。」という意味で、「不尷不尬」は「どう処理すれば分からない、対処しにくい」という意味である。

ⅲ明代末期凌濛初が著した『初刻拍案驚奇』では、「雖是寄了一兩番信，又差了一兩次人，多是不尷不尬，要能不夠的。」という用例が見られる。この場合は「何回手紙を出して、また人を遣って見たが、多くは上手くいかず、全く使いものにならなかった。」という意味で、「不尷不尬」は「問題解決にならない、使えない」という意味である。

ⅳ清代馮夢竜が著した『醒世恒言』第三十四卷では、「看了那樣光景，方懊悔前日逼勒老婆，做了這樁拙事。如今又弄得不尷不尬，心下煩惱」という用例が見られる。この用例では、「後悔した上に、今も窮地に陥ってしまい、イライラする。」という意味で、「不尷不尬」は「窮地に陥る様子」を表している。

ⅴ清代曹雪芹が著した『紅楼夢』第九十回では、「及見了寶蟾這種鬼鬼祟祟，不尷不尬的光景，也覺了幾分。」という用例が見られる。この場合は、「寶蟾の怪しくて疑わしい様子を見てから、ますますそう思ってきた。」という意味で、「不尷不尬」は「怪しい、疑わしい」という意味である。

ⅵ清代吳敬梓が著した『儒林外史』第二十二回では、「外甥女少不的是我們養著、牛姑爺也該自己做出一個主意來。只管不尷不尬住著、也不是事。」という用例が見られる。この場合は、「姪っ子はいつも私たちが養っていますが、あなたもいい加減決断をしてください。このままはっきりせずにここに住んでも良くないです。」という意味で、「不尷不尬」は「はっきりしない」という意味である。

ⅶ清代李漁が著した『凰求鳳』の第二十六出では、「真是個疑心生暗鬼、為甚麼他去了半晌、覺得我身子裡面、有些不尷不尬起來。」という用例が見られる。この場合は、「本当に疑心暗鬼を生ずという通り、どうして彼がちょっと離れただけなのに、あたしはもうイライラして気持が悪くなった？」という意味で、「不尷不尬」は「気分が悪くなる、くつろげない」という意味である。

ⅷ清代李漁が著した『玉騷頭』という戯曲の第二十出では「如今要與劉公公商議、作樁不尷不尬的事兒。」という用例が見られる。この場合は、「今は

劉公公と相談して、公にはなれないことを計画する」という意味で、「不尷不尬」は「秘密なこと」という意味である。

ix清代李漁が著した『十二楼』の第十二回、巻五『歸正樓』第二回に「我看你進京一次也費好些盤纏，有心置貨、索性多置幾箱、為什麼不尷不尬、只帶這些。」という用例が見られる。この場合は、「あなた都に一回来て、かなり旅費がかかるでしょう？仕入れようと言う気があるなら、何故けち臭くこれぐらいしか買わないの？」という意味で、「不尷不尬」は「けち、吝嗇」という意味である。

よって、上記の各用例から、「孫八救人得福」における「不尷不尬」を「フラチ」と訳したのは極めて適切なもので、数多くの意味から選択した物語に最も相応しい適訳だと判断できる。

また、「不尷不尬」の「不」はただ音節を補い、語気を強まる役割を果たすだけで、否定する意味は含まれてない。従って、語義的には「尷尬」や「不尷尬」と同じである。『水滸傳』貫華堂本、巻之十四には「尷尬」の用例が見られる。

【例】李小二應了、自來門首叫老婆道、「大姐、這兩箇人來得不尷尬。」老婆道、「怎麽的不尷尬。」小二道、「這兩箇人語言聲音是東京人初時又不認得管營…」

この場合、「不尷尬」は前述した「不尷不尬」の意味 i と同じく、「怪しい」という意味である。

4）粧扮（ヨソオヒ・シャウソク）

【漢文】孫八在人叢中視此少年約年十六七、花塊面貌、玉砌身軀、氣色和順、粧扮風流、真男中美人也。

【訳文】孫八其少年ヲ視ルニ。年十六七バカリニテ。花ヲ塊タル面貌。玉ヲ砌タル身軀。氣色和順。粧扮風流真ノ男中ノ美人ナリ。

（孫八はその少年を見た。彼は歳およそ十六、十七歳で、顔は花のように美しく、体つきは玉のように玲瓏として、心は和やかで、身だしなみはとても風流で誠に男の中の美形である。）

上記の例文から見ると、岡島冠山は「粧扮」を「ヨソオイ」と「シャウソク」と注釈した。左注の「ヨソオヒ」は「装い」であり、右注の「シャウソク」は「装束」である。「装束」という語彙は、『和名類聚抄』にすでに「装束部」とあるように、平安時代よりも早い時期にすでに日本語に定着したと考えられる。よって、この場合は、すでに日本語に定着した漢語語彙を用いて、新しく伝来した中古漢語語彙を解釈する一例である。

また、「装い」は身なりを整えることや衣服を身につけることを指し、他にも、「偽装する」という意味も含まれる。が、右注の「装束」は衣服を身につけるという意味しか含まれていないから、注釈の意味が特定された。文脈によれば、少年は美人で、風流に偽装したとは考えられなく、風流な服を身に着けたと判断したほうが適切である。

一方、漢語として、「粧扮」は3つの意味を包含している。

ⅰ元代高明が著した『琵琶記』第二十七出では、「恰纔小鬼是我粧扮的。」という用例が見られる。この場合は、「さきの鬼は私が仮装したものだ」という意味で、「粧扮」は「仮装する、ふりをする」という意味である。

ⅱ明代施耐庵が著した『水滸伝』第八十二回では、「粧扮的是太平年萬國來朝，雍熙世八仙慶壽。」と言う用例が見られる。この場合は、「演目を演じる」という意味で、「粧扮」は「演じる」という意味である。

ⅲ清代呉敬梓による『儒林外史』のにおいては「這姑娘有個兄弟，小他一歳若是粧扮起來，淮清橋有十班的小旦，也沒有一個賽的過他。」という記述が見られる。この場合は「この娘には一歳年下の兄弟がいて、彼が身だしなみを整えると淮清橋の小旦が何人居ても敵わない」という意味で、「粧扮」は「身だしなみ、または身だしなみを整える動作」を意味する。

よって、上記の各用例から、「孫八救人得福」における「粧扮」を「ヨソオイ」や「シャウソク」と訳したのは極めて適切なもので、数多くの意味から原典を充分理解した上で振られた適訳だと判断できる。

5）拘束（ヘンクツ）

【漢文】足下何太拘。萬望權且收之。

【訳文】足下何故太タ拘束ナルゾ。我存念ニ任セテ。權且此金ヲ收メ候ヘト。

（あなた何故こんなに頭が堅いの？私の心根を察して、このお金を一応受け止めてください。）

上記の例文から見ると、岡島冠山は「拘束」を「ヘンクツ」と注釈した。「ヘンクツ」は「偏屈」であり、「すなおでなく、ねじけていること」を指している。「拘束」は漢語として、大きく二つの意味を持つ。

ⅰ晉代葛洪が編纂した『神仙伝』巻九・介象では、「書生知象非凡人、密表奏象於主、象知之欲去曰、恐官事拘束我耳。」という記述が見られる。この場合は「書生は象が凡人じゃないことを知り、密かに主に象のことを報告した。象はこれを知って去ろうとして「綴じ込まれることを恐れているのだ」と言った。」という意味で、「拘束」は「自由を制限されること」という意味である。

ⅱ清代曹雪芹が著した『紅楼夢』第二十に回では、大観園の皆が集まった席に賈政が現れ、誰もが口数を減らした場面に、「寶釵原不妄言輕動、便此時亦是坦然自若。故此一席、雖是家常取樂、反見拘束。」という記述が見えられる。この場合は、「寶釵は元々軽率な行動をとらない人だから、たとえこんな時にでも、余裕で落ち着いている。故に、この一席は一家団らんの場なのに、皆がとっても不自然であった。」という意味で、「拘束」は「不自然、堅苦しい」という意味である。

また、「偏屈」はすなおでなく、ねじけていることを指している。よって、「偏屈」は「拘束」の意味と若干ズレがある。一方、文脈によれば、孫八はどうしてもお金を受け取らないから、「頭が固い、堅苦しい」と言われている。よって、「拘束」は漢語としての意味ⅱと同じく、性格がすなおでないことを表現しているから、傍訳である「偏屈」は文脈を考えた上に振られた適訳だと判断出来る。

5. 終わりに

『唐話纂要』所収「孫八救人得福」は上記の分析から『唐話纂要』所収「孫八救人得福」における近世漢語受容の特徴を以下のようにまとめる。

①例 1）と例 2）のような、言葉に対する語釈だけでなく、読者を見据えて、物語をより分かりやすくするための追加情報を加えた傍訳が多く見られる。

②また、例 3）のように、言葉に対する単純語釈で、近世漢語語彙を充分理解した上に、文脈に相応しい意味を選択した傍訳も見られる。

③そして、例 4）と例 5）のような他の漢語を用いて近世漢語語彙を訳す場合も見られる。

全てが著者・訳者である岡島冠山が近世漢語としての意味を十分理解した上で文章に用いた語彙であり、翻譯に際しては更に江戸期当時の慣用的な言葉や物語をよりわかりやすくするための工夫を凝らしている。

このように、江戸期の唐話学者は中国経典の勉強から得た経験や知識を用いて、新たに輸入してきた白話語彙や近世漢語語彙を読み解く能力がかなり優れていると言えよう。上記の用例の他にも、例えば「權且」という言葉が見られる。「足下何太拘。萬望權且收之。」の原文に対して、「足下何故太タ拘束ナルゾ。我存念ニ任セテ。權且此金ヲ收メ候ヘト。」と訳され、「權且」には「カリニ・カツ」という傍訳が振られている。この場合、「權」と「且」は経史子集によくでられている文字であり、すでに「仮に、一時的に」と「かつ、その上に」という意味で日本語に定着した。よって、近世漢語語彙としての「權且」は漢語としても中古漢語から引き継いて成り立った言葉であり、中国経典の勉強から得た経験や知識を用いて読み解くことが出来る。しかし、これは傍訳と言うより、「權且」という近世漢語語彙を訓読した用例だと判断し、本研究では傍訓として別課題で検討する。

注

1）長澤規矩也編著　『唐話辭書類集　第六集』（古典研究會　1972）

2）石崎又造 『近世日本における支那俗語文学史』（光明社　1967.09.15）

3）奥村佳代子 「近世日本における中国語受容の一端　―岡島冠山によって紹介された「唐話」―」『中国語学』第 248 号 （関西大学　2001）

4）王佳璐 「日本漢文小説誕生の前夜及び江戸期漢文小説の紹介」『外国語学会誌』第 40 号 （大東文化大学外国語学会　2011.03）

5）王佳璐 「岡嶋冠山の漢文小説に見る白話語彙の性格―「太平記演義」と「唐話纂要」巻六との比較を中心に―」『指向』第 6 号 （大東文化大学大学院　2009）

6）訳は筆者によるもの。以下同様。

8）王三慶　莊雅州　陳慶浩　內山知也　主編 『日本漢文小説叢刊』第一輯神怪傳說類・講史類　第四冊 （臺灣學生書局　2003）p.269